2012/8

リサーチ

No.116

通巻 173

平成24年８月８日

発行者
北海道公民館協会
会長　松藤藤吉
〒060-0002 札幌市中央区北2西7
かでる2・7（9F）
道立生涯学習推進センター内
011(271)2825

ポルトガルの美しい「公民館」

北海道公民館協会会長　松藤藤吉

■先日テレビで、ポルトガルの農村を取材した旅番組を見ることがありました。

北海道でいえば、富良野・美瑛を思わせる丘と畑のある農村風景が続き、その中に小さな集落があり、小さな町があって、中央に広場がある。

教会のそばに集会所らしい石造りの建物がある。そこへ、夕暮れになると三々五々村人が集まってくる。パブのようなところでは、すでにビールを飲みつつ談笑する人々が見られ、ホールではバンドが音楽を奏で、歌い踊る人たちもいるといった光景でした。

ヨーロッパの美しい村の風景と歴史のある建造物、素朴な人々の日常といったいかにも旅番組らしいつくりだったのですが、記憶に残ったのはレポーターの若い女性がその場の紹介を「**日本にたとえれば公民館のようなところです**」と説明したことです。

私の関心は番組の美しい風景から転じて、この女性の公民館体験に移りました。たぶん、この女性は、同じような光景を育った地方の公民館で見たのだと思います。

このような公民館体験、公民館像は若い世代に伝わっていた、私はこの時そのことをうれしく感じました。

■公民館の生い立ちについては、知られるとおり昭和二十一年（一九四六年）終戦の翌年です。

戦後の地方を再建するために、当時の文部省は各都道府県に通達を出しました。

「公民館は全国の各町村に設置せられ、此所に常時に町村民が打ち集まって論談し読書し、生活上・産業上の指導を受け、お互いの交友を深める場所である。」

各地域に公民館という機関を建設・設置して、そこに職員を配置し、国や都道府県、市町村の政策を国民一人一人におろしていく。

これを、国や行政から公民館の必要性を求めたとする理解もあります。しかし、この通達は不思議に人間くさく、公民館の定義も言い得ている観があります。「常時に町村民が打ち集まって論談し読書し・・・お互いの交友を深める場所である。」これは女性レポーターが見ていた、彼女の記憶にある公民館そのものではないでしょうか。

■社会教育から生涯学習へ移行する過程は、公民館の変遷の歴史でもあります。

集団から個人へ、地域から都市へ、町村民が都市住民に変貌していく中で、公民館も生涯学習センター化していくことを求められたのかも知れません。

しかし、公民館の「集う―学ぶ―結ぶ」という機能は、世代を超えて、脈々と伝わっていることを感じています。

全国公民館研究集会 inふらのに向けて

北海道公民館協会　副会長
岡部　義孝

第五十七回を数える北海道公民館大会を兼ねた「第三十五回全国公民館研究集会inふらの北海道」が来る平成二十五年十月、富良野市を会場に開催される。ラベンダーの香りと「北の国から」、さらにはワールドカップスキー大会の開催など、「その町・富良野」は今や北海道を代表する観光都市の一つとなっている。ふらのワインやメロン、スイカなど味覚面でも魅力満載のまち・富良野。

来年の全国大会を心待ちにする公民館関係者も少なくないであろう。

大会の準備も着々と進んでいる。

北海道段階での実行委員会には北海道公民館協会の松藤藤吉会長が実行委員長に就任。また、地元レベルでは富良野市実行委員会が組織され、富良野市・上富良野町・中富良野町・南富良野町・占冠村の各教育長がしっかりとスクラムを組んだ。

大会のテーマは「地域を育む公民館活動～コミュニティづくりに求められる公民館のあり方」。開催要項における大会の趣旨を大まかに記すと次のとおりとなる。「戦後の復興再建の原動力として潤いのある地域社会の実現に大きな役割を果たしてきた公民館。一方、我が国では、少子化や都市化、高度情報化、地方分権化など経済や社会状況の著しい変化の中で、地域の教育力の低下が指摘されている。これからの公民館には、住民が集い学ぶ地域コミュニティの拠点施設として、これまでの蓄積を大いに生かした活動が求められるとともに、地域を担う人材の育成など、その機能と役割を充分に認識する必要がある」と。まさしくその通りだ。人づくり、そしてそれを通した地域づくりこそ社会教育の果たすべき責務であり、同時に社会教育の実践機関たる公民館の責務であることは申すまでもない。

大会第一日目、十月十七日の全体会では、文部科学省からの施策説明と記念講演を行い、大会第二日目には、講話や実践発表など、五つのテーマから地域のコミュニティづくりを掘り下げる、名付けて「スーパー塾」が開講される。「学校を核としたコミュニティづくり」、「スポーツを核としたコミュニティづくり」、「防災を核としたコミュニティづくり」「文化活動を核としたコミュニティづくり」、さらに「高齢者を核としたコミュニティづくり」との各テーマそれぞれに、吉田博彦氏（NPO法人教育支援協会代表理事）、佐藤勇一氏（秋田市中央公民館前副館長）、出口寿久氏（和歌山大学生涯学習センター教授）、太田竜介氏（富良野演劇工場工場長）、讃岐幸治氏（愛媛大学名誉教授・松山大学客員教授）の五氏が塾長として張り付き、それぞれに「吉田塾」「佐藤塾」「出口塾」「太田塾」「讃岐塾」との名が冠せられるユニークな試みだ。従前から北海道の公民館活動推進に多大なるお力添えをいただいてきた講師陣による、例えるならば「オールスター戦」といった印象が強い。当日どの塾に参加するか迷ってしまうほど今日的なテーマが並ぶが、とりわけ注目すべきはやはり「防災」であろう。私たち日本国民にとって、それ以前とそれ以後のあらゆる価値観を決定的に異なるものとした出来事がある。

昨年三月十一日の東日本大震災だ。被災地では多くの公民館が避難所として位置づけられ、さらには、日常の公民館活動、そのネットワークが被災者支援に大いに活かされた例が数多く報じられた。

そしてこのことは、人と人とを結ぶ絆の構築、あるいは心豊かで安全かつ安心な地域社会の実現に、公民館がかって果たしてきた、さらにはこれからもしっかりと果たして行かなければならない役割を改めて認識させる結果となったのである。その他、子ども達の学力向上に向けたいわゆる「学者融合」の必要性や、と

りわけ北海道では限界集落化の危険性をも抱える超高齢化社会のなかで地域はどうあるべきかといった山積する課題に多くの貴重な示唆、提言を、与えてくれるであろう「スーパー塾」へ期待するところは大きい。

富良野での全国大会開催まで残すところ一年余りとなった。全国の公民館関係者、社会教育関係者が一堂に会し、特色ある実践活動に裏打ちされた真摯な議論を交わし、夜にはまた富良野の名産と名酒で交流を深める本大会が、それぞれの地におけるこれからの公民館活動をなお一層充実させ、豊かな地域社会の実現へと導く、その礎となる二日間であることを確信している。自身も、実行委員会に名を連ねる者の一人として微力を尽くしてまいる所存である。

我が北海道公民館協会に集うお一人お一人に力強いご支援・ご協力を切にお願いしたい。

上富良野町の生涯学習の推進 ～住民主体の学習活動～

上富良野町公民館主事　鈴木　真弓（社会教育班主幹）

上富良野町の概要

上富良野町は、上川管内ほぼ中央部で十勝岳の麓に位置し、富良野盆地の丘陵地帯と田園風景を見ることができます。

また、周囲が山に囲まれているため、気温の日格差・月格差が大きく農作物の稲作や野菜・果物の栽培に適しています。

人口は一一、七二三人（六月末現在）です。

町は、平成二十一年度から第五次総合計画を策定し「**四季彩の町かみふらの―風土に映える暮らしのデザイン―**」を将来像と定め、まちづくりを進めています。

また同年に教育委員会でも「**上富良野町教育振興基本計画（第七次社会教育中期計画を包含）**」を策定し、生涯学習の推進に努めています。

社会教育は、今年度から二カ年かけて第八次社会教育中期計画策定にむけて見直しを図っていきます。

上富良野町の生涯学習施設

町民の生涯学習の拠点は、公民館本館及び十一の分館、体育館と武道館が併設している社会教育総合センターや公民館内に併設している図書館及び隣接している郷土館。

また、開基百年記念として設置された開拓記念館と多世代の交流を目的としたセンターも二カ所あります。

屋外施設では、運動公園広場（野球場・サッカー場・テニスコート）や島津球場、そしてB&G海洋センターとゲートボール場、地域には五ヶ所のコミュニティ広場があります。また指定管理によるパークゴルフ場とスキー場もあります。

平成二十三年度利用実績は、延べ二十七万八千三百七人の多くの方が利用しています。

生涯学習活動の推進

一　少年教育と家庭教育の充実

少年教育の一環として、平成十六年度から小学四年生から六年生を対象に、通学合宿（わくわく合宿）を九年間継続して実施しています。

学校も、学年も異なる子どもたちが事前研修会と二泊三日の合宿で公民館に宿泊し、清掃・食材の買い物と家計簿の作成、調理や宿題等、日常生活の様々な体験を研修として行っています。

献立から食材を予算内で購入すること、栄養士とボランティアの指導をうけて自分たちで食事の支度をすることで、三日目の夕食には、家族等を招いて会食することもできました。

会場準備から後片付けまでみんなで協力して取り組み、家族への感謝の気持ちと仲間を信頼することで強い絆が生まれたようです。

今年度から子どもたちが研修している時間と平行して、保護者対象に研修会を開催しました。

講師の上川教育局社会教育指導班主査から、親子のコミュニケーションや生活リズムの重要性など、健やかな体と豊かな心を育むために重要なのは「家庭」であることを学習しました。

後日、参加児童及び保護者から提出された感想文には、家庭生活での見直しについて記載され、成果を得ることができました。

二　住民自ら取り組む公民館講座～学校教育施設等を活用

公民館講座は「公民館主催事業」と町民が主催する「マイプラン・マイスタディ講座」があります。

公民館主催事業の一つとして、町内の小学校に併設されている天体望遠鏡を活用し「天体観望会」を開催しています。

町内の親子や富良野圏域からも参加され、今年は、月や惑星等の観望の他に「金環日食」や「金星太陽面通過」もあり、興味を持って参加している方が増えています。

天候に左右される事業ですが町内在住の北海道大学生涯学習計画研究員の方のご支援により町広報誌への連携や観望会の指導及び映像による学習を準備するなど工夫しています。

マイプラン・マイスタディ講座は、町民が自ら企画・運営する講座で、今年は「絵本読み聞かせ講座」が開催されました。

企画運営委員会は講師の依頼や申込受付、資料の作成などを準備することで役割分担等を学びます。

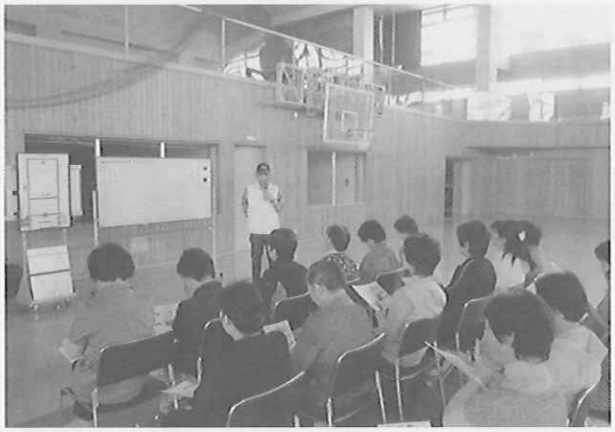
講座では絵本の読み聞かせは、子どもたちの興味の引き出しを見つけること、声にだして読むことで読み手と聞き手との間にコミュニケーションの世界が広がること等を研修しました。

講座終了後には、受講した方が町内の読み聞かせサークルに加入するなど、住民の学習活動の推進に繋がっています。

三　女性及び高齢者の生涯学習

女性の生涯学習として「女性学級」を開講しています。

今年度は四十名が受講し、学習計画は、年間九回について学級生自ら計画を立て運営しています。



今年度は、防災講話や議会傍聴、パッチワークやフロアカーリング、その他教養を高め学級生間の親睦交流を図るための社会見学等が計画されています。

また、高齢者の生涯学習の一環として実施している「いしずえ大学」は、今年度開講四十周年を迎えました。これまで六六八名が卒業し、今年は十学年、百三十二名の学生が年間二十五回のカリキュラムで学習しています。

交通安全や健康づくり、落語口演会等道民カレッジ連携講座にも登録し大学生以外の方も聴講しています。

大学の入学は六十歳以上の方が対象ですが、七十歳を超えてから入学される方も増えており、今後ますます高齢者の方が元気に通学され、地域のリーダーとして活躍していただけるよう継続していきます。

今後にむけて

住民の学習環境を整えることは、住民のニーズを把握することが重要です。

特に、住民が自主自立した学習に取り組む場合は、サポートしていく側の課題もあります。

熱心であればあるほど、依存度が高くなったり、相互の役割を確認しておかなければトラブルの原因となることもあります。

「人」が「人」を育んでいきます。

親子・家族、隣近所・町内会や住民会、保育所・幼稚園・学校、職場や地域を通じて、町民が健康で元気に生涯学習活動を継続していくよう、コミュニケーションを大切にし「町民が主人公」となれるよう活動を推進していきます。

～人と人がつながる公民館をめざして～

留寿都村公民館長
福盛　正洋

1、留寿都村の概要

留寿都村の人口は約二千人で、豊かな高原台地と羊蹄山をはじめとする四季折々の美しい山並みに囲まれた後志管内の村です。また、高原の澄んだ空気が高品質な農畜産物を生産する活気ある農業地であり、国内外からの観光客を集める国際観光リゾート地でもあります。

2、留寿都村公民館の実態

留寿都村公民館は、ホール及び調理室をはじめ、会議室四部屋並びに和室三部屋を設けており、村事業・各種行事・運動教室の開催・サークル活動・町内会の会合などで老若男女問わず、多くの住民に利用されています。

また、公民館内に図書室があり、約一万五千冊の蔵書の貸出しを行っています。

さらに、郷土資料室には昔の農耕具や昔の日用品等を展示し、村外からの見学者もいます。

ロビーにはトレーニングマシンを六台設置し、住民の健康促進を積極的に行っています。

留寿都村の豊かな未来を切り拓いていくのは「人」であります。未来を担う「人づくり」のために、生涯学習を活性化させ、人と人がつながる公民館づくりをめざしています。

3、平成二十三年度「人と人がつながった」二大行事

●音楽鑑賞会「東日本大震災復興支援　土田英順チャリティーコンサート」開催

平成二十三年九月一日（木）音楽鑑賞の機会が少ない住民に鑑賞機会を提供し、芸術文化を愛し、理解する心を養ってもらうことを目的に、留寿都村文化団体連絡協議会が主催となりチェロ（元札幌交響楽団の土田　英順氏）とピアノ（矢崎　有佳氏）によるアンサンブルコンサートを開催しました。

また、同年三月十一日に発生した東日本大震災の復興支援に寄与する目的でもあり、土田氏と矢崎氏のご好意により、参加者八十三名のチケット代は全額、義援金として被災地に寄付しました。

●第四十七回留寿都村公民館まつり開催

公民館まつりは、地域住民の文化の創造をめざし、郷土意識の高揚を図ることを目的に、総合文化祭として実施しています。

第四十七回留寿都村公民館まつりは、平成二十四年一月二十八日（土）～二十九日（日）に、住民や児童生徒の作品展示、文化サークルによる芸能発表、子ども百人一首カルタ大会や囲碁教室などの催し、農協女性部や農協若妻会のバザーやフリーマーケット、留寿都高等学校による花卉即売会などを実施し、大勢の参加者や来場者でにぎわいました。

作品展示では、姉妹都市交流を目的に兵庫県養父市の児童の作品展示も行い、文化サークルによる芸能発表では、子ども達によるヒップホップ・太鼓・ピアノ、一般の部では、合唱・合奏・舞踊・詩吟・カラオケを発表し、日頃の練習の成果を披露しました。

4、今後に向けて

近年「人間関係の希薄化」という言葉を耳にするようになりましたが、人は一人では生きていけません。困っている人がいたら手を差し伸べたり、時には助けられたりして生きています。

公民館は、人と人が気軽に集まれる場であります。公民館で行っている盆踊りで知らない子どもと大人が一緒に踊る、サークルで同じ趣味を持った人が公民館に集まり、一緒に活動する。

公民館という場を通して、人と人のつながりをより一層濃いものにしてほしいと思っています。

また、より多くの人が公民館を利用できるように、魅力ある公民館行事に向けて取り組んでいきます。

平成二十四年度定期総会報告

去る四月二十六日、札幌市かでる2・7において、平成二十四年度定期総会を開催いたしました。

来賓として北海道教育庁生涯学習課　立野課長のご臨席を賜り、祝辞をいただきました。総会議長には紋別市教育委員会の酒井課長を選出し、審議では、報告事項三件、議案四件を提案し、それぞれ承認されました。

昨年度は、北海道公民館協会六十周年の記念すべき年となり、本道公民館民館の六十年間の歩みをまとめた記念誌を発行し、記念祝賀会も開催しました。

本年度は、来年十月に第三十五回全国公民館研究集会を富良野市において開催するために、実行委員会を組織し、開催運営の体制整備を図ります。

【報告事項の概要】

報告第一号では、「平成二十三年度事業報告」をいたしました。

六十周年記念事業であります第五十五回北海道公民館大会兼全国公民館連合会北海道ブロック大会は札幌市かでる2・7で開催しました。文部科学省社会教育課の塩見課長による講演のあと、パネルディスカッションを行いました。二日目は「新しい公共と社会教育」をテーマにグループ熟議を行いました。

また、公民館職員の資質向上を図るために、二回目となる全道規模の「職員研修会」を開催しました。「地域の新しい公共づくりに果たす役割」のテーマによるパネルディスカッション、グループ熟議、役に立つチラシ作りなど、今後の公民館運営に役立つメニューで、今後も、公民館職員として必要な知識・技能を身につけ、実践に役立つ研修会をめざして行きます。

時代は刻々と変化していますが、次代が変化しても、公民館として貫かなければならない、大切にしなければならない使命があります。また、次代の変化に応じて、関係職員・委員が変化していかなければならないことがあり、そのためには、大会や研修会で得たことを生かしながら、今後の公民館活動に役立ててください。

報告第二号では「決算報告」を、第三号では「監査報告」を行い、全て提案どおり承認されました。

【議案の概要】

議案第一号「平成二十四年度活動方針（案）」、議案第二号「事業計画（案）」では、本年度の第五十五回北海道公民館大会兼全国公民館連合会北海道ブロック大会を壮瞥町で開催することに決定しました。多くの関係者の参加をお願いいたします。

平成二十五年度全国公民館研究集会の開催に向けて、実行委員会を組織し、準備を進めてまいります。

議案第三号「収支予算（案）」の一般会計・特別会計予算は、提案どおり承認されました。

議案第四号では役員補充について審議し、人事異動等による後任者の就任について承認されました。

全道公民館職員研修会終了

「全道公民館職員研修会」が、七月六日にかでる2・7で開催され、「新しい公共　既成概念を超えた公民館～公民館ってなんのためにあるのだろう～」をテーマに、全道の公民館関係者五十三名が参加し、熱心に研修しました。

開会行事の後、道教委生涯学習課小野主幹より「コミュニティ・スクール」の説明があり、続いてコーディネーターをNPO法人教育支援協会代表理事　吉田博彦氏にお願いし、四名のパネリストを迎えのシンポジウムを開催しました。

◎シンポジウム

◆パネリストの自己紹介と今回のテーマでどんな考えをもっているか

○佐藤晴夫氏（新潟市北地区公民館長）～新潟の北部の小さな公民館の館長。自分の公民館の運営方法は、普通に基本通り行っているが、責任のある公民館でいようという事を職員に言って守ってもらっている。その普通を基本に住民にお手伝いされながら、お手伝いしながら運営している。

○上松丈夫氏（中札内村教育長）～教員、派遣社会教育主事等を経て、現在中札内教育長。各地を回っているうちに北海道にはまともな公民館があるのかと疑問や心配に思うようになった。テーマを関心をもたれない公民館と捕え考えて行きたい。中札内村では公民館の学ぶ・集う・結ぶ機能が無いので変えていきたい。

○矢吹俊男氏（前倶知安町公民館長）～学芸員として採用され、一度も教育委員会から出たことが無いまま定年。繋ぐ・繋げるという事を大事に仕事をし、四十年も続いている講座もあり、現在それが自立している。男の願望を講座にし、サークルにしていくという事を思ってやってきた。職員には自分がやりたい講座をどんどんやりなさいと言ってきた。駄目だったら止めて、なんで駄目だったのかを検証してから次に繋げるという事が大事。公民館では昔と今を繋ぐという事は絶対必要なので、公民館の歴史という物を把握してもらい、何故今公民館はこうなっているのかを検証してほしい。なぜ公民館は必要だったかが載っているので古い本を是非読んでもらいたい。

○村上英己氏（全国公民館連合会事務局次長）～全公連で月刊公民館を発行している編集者で、全国の公民館調査もしている。全国的にも今公民館は下向きであるが、地域によって頑張っているところやそうで無い所があり、北海道では自分たちが危機意識をもって頑張っている地域ではないかなと思っている。八月号の月刊公民館で「今・北海道の公民館が熱い」とのタイトルで北海道特集を組むので、是非見て頂きたい。公民館とは信頼される場所であり、住民にその事を発信していかなければならい場所である。

◆公民館や社会教育を活性化させるためには

○北海道では社会教育は衰退してはいないが、行革により職員が減っている。なぜ公民館が必要かといえば、地域にはコミュニティホールなどの施設はあっても実は殆ど活用されていないのが現状。だけど公民館では職員がいて親切に挨拶もしてくれ、地域の情報もある。北海道の公民館は劣悪な環境もありきちんとした物が無かったが、そこに命を吹き込んでくれたのが住民たちだった！公民館を無くせと言われても無くすわけにはいかない。何故なら公民館は住民皆のものだから・・・

○人が減らされて、民間委託という話が出てきた二〇〇〇年以降、新潟では行政改革という言い方が非

常に美しい響きの言葉として考えられ、行政改革やコスト削減が大変いい事と捕えられた。社会教育の現場でも同じで、地域コミュニティ運営と公民館運営は兄弟みたいなもので、一般地域住民でも運営できるぞとの見解がある。なのでこの考えは理屈的には私は大賛成である。無くしても良い公民館を住民がどのように考えているかを逆に問うやり方で住民に考えさせるが、地域コミュニティ運営では絶対うまくいかないのは目に見えている。ここで公民館理念という物が地域の活性化に役立つ。

○公民館の重要性がいかに大切かを住民にも広く訴えかけるためにも、最初はコミュニティ活動として集う・集まる・結ぶことの大切さを考えていくことが公民館としての役割だと思っている。まずはコミュニティ活動からはじめて住民に理解してもらうのが大事。

◎グループ熟議

午後からはシンポジウムの発言をもとに、五班に分かれて熟議に入り、今現在公民館に足りない物や、情報の発信方法の大切さ等を出し合い話し合いました。どのグループも似たような問題点があり、等ホームページの重要性や文化団体の高齢化による後継者の育成が出来ず、利用団体が減っていく現状などが出されていました。

次に、自分の公民館では明日から何が出来るだろうという課題に対し、色々な地域の事例集を作り活用するとか、子ども達を使って町をＰＲしたり、ＣＭや映画を作り映像を通して発信するという事が全国的に増えてきている等の意見がだされていました。また、公民館に携わって日が浅い一～二年の職員から、実際どのように進めていくとか運営してよいか等分からない、との意見も出され、研修のあり方等を変えていく必要もあるとの意見も出されていました。

以上、本年度は一日日程で開催しましたが、内容の濃い研修会となりました。各市町村では公民館担当者の異動サイクルが短くなり、公民館についてよく理解しないまま、仕事に追われて前年踏襲で仕事をされている方もいると思います。今後も会員皆さんの意見を取り入れながら、さらにより良い研修としていきますので、希望する研修内容があればぜひ事務局までお知らせください。

全国公民館連合会定期総会

去る六月六日・七日、全国公民館連合会の第一回定期総会が東京で開催されました。

全公連は公益社団法人へ本年四月一日をもって移行が完了したため、通算では五三回目ですが、本年第一回目の総会となりました。

本年度の全国公民館研究集会開催県の滋賀県公連会長の議長により進められ、冒頭、鹿熊会長より「大震災を教訓に、自然・協同・創造をキーワードに明日の見える公民館活動が展開されている。公民館活動の最大の特徴は、平時において住民、職員が顔見知りの関係がある。震災でも顔見知りを基に、地域の絆が図られている。」と挨拶がありました。

提案された議事は全て承認され、来賓として出席した文部科学省大臣官房審議官　上月正博氏より「社会教育行政の推進と施策の動向―公民館の活性化に向けて―」と題して講話がありました。

また、全公連で取り組みを推進している熟議を、総会後に二日に渡り実施し、各公連の会長・事務局長などが実際に熟議を体験しました。全公連から各公連でも積極的に取り組むよう要請がありましたので、道内でも既に取り組んでいるところはありますが、多くの市町村での取り組みをお願いします。なお、熟議に取り組む公民館に対しては、全公連より一回あたり一万円の助成がされます。

平成24年度　北海道公民館協会役員一覧

役　職	支部	氏　名	市町村名	職　名	役　職	支部	氏　名	市町村名	職　名
会　長	上川	松藤　藤吉	中富良野町	教育長	常任理事	釧根	下栃棚弘子	根室市	社会教育課長
副会長	上川	北川　雅一	上富良野町	教育長	理　事	胆振	東　龍一	安平町	教育次長
副会長	後志	早瀬　良樹	寿都町	教育長	理　事	上川	大滝　憲孝	美瑛町	生涯学習課長
副会長	胆振	小林　一也	壮瞥町	生涯学習課長	理　事	網走	今西輝代教	置戸町	社会教育課長
副会長	釧根	岡部　義孝	釧路市	生涯学習課部次長	理　事	釧根	斎藤　博昭	白糠町	社会教育課長
常任理事	上川	箔谷　茂	名寄市	公民館館長	監　事	後志	槙野　寿弘	倶知安町	公民館館長
常任理事	渡島	松本　亨	七飯町	生涯学習課長	監　事	上川	福田　学	旭川市	公民館事業課長
常任理事	網走	菊地　美鈴	網走市	社会教育次長					

平成24年度　北海道公民館協会支部事務局所在地

支　部	郵便番号	所在地	名　称	電話番号
後　志	048-0405	寿都町開進町187-1	総合文化センターウィズコム内	0136-62-2100
胆　振	052-0101	壮瞥町滝之上287-7	壮瞥町教育委員会生涯学習課	0142-66-2131
渡　島	041-1111	七飯町本町568-8	七飯町文化センター内	0138-66-2066
上　川	096-0023	名寄市西13条南４丁目	名寄市公民館	0165-42-2218
網　走	093-0051	網走市潮見町１丁目	網走市教育委員会社会教育課	0152-43-3704
釧　根	087-0006	根室市曙1-40	根室市教育委員会社会教育課	0153-24-3188

平成24年度　北海道公民館協会加盟市町村名

支　部	市町村名	支　部	市町村名
後　志 ４町３村	寿都町　ニセコ町　真狩村　泊村 留寿都村　余市町　倶知安町	上　川 ４市16町 ２村	旭川市　士別市　名寄市　富良野市 東神楽町　上富良野町　美瑛町 中富良野町　占冠村　南富良野町 東川町　鷹栖町　愛別町　上川町 当麻町　比布町　和寒町　剣淵町 下川町　美深町　中川町 音威子府村
渡　島 ５町	鹿部町　知内町　八雲町 森町　七飯町		
胆　振 １市４町	苫小牧市　豊浦町　白老町 壮瞥町　安平町		
釧　路 根　室 ２市10町 １村	釧路市　釧路町　白糠町　浜中町 標茶町　弟子屈町　鶴居村　厚岸町 根室市　別海町　標津町　羅臼町 中標津町	※支部はないが直接加盟している市町村 札幌市　千歳市　恵庭市 栗山町　奈井江町　苫前町 浦幌町　利尻富士町　新ひだか町　新冠町　中札内村	
網　走 ３市４町	網走市　北見市　紋別市　遠軽町 斜里町　訓子府町　置戸町	※加盟市町村数70（13市50町7村）７月末現在	

◆北海道公民館協会所在地

〒060-0002　札幌市中央区北２条西７丁目
北海道立生涯学習推進センター（通称：かでる２・７）９階
TEL・FAX　０１１－２７１－２８２５　VOIPTEL　０５０－３３３８－４３７０
dou-kouminkan@crocus.ocn.ne.jp

◆公益社団法人全国公民館連合会所在地

〒105-0001　東京都港区虎ノ門1－16－2　飯島ビル３階
TEL　０３－３５０１－９６６６　FAX　０３－３５０１－３４８１